

IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 フィックスパック 1 README



製品更新の概要

IBM® Tivoli® Monitoring for Transaction Performance 5.2 フィックスパック 1 は、以下の製品フィーチャーと機能拡張を提供します。

表 1. フィックスパック 1 の更新

更新済みオペレーティング・システムとデータベース・サポート	参照
管理エージェントに対する Windows® 2003 オペレーティング・システムのサポート	2 ページの『Windows 2003 オペレーティング・システム上の管理エージェント』
管理エージェントに対する WebSphere Application Server、バージョン 5.0.2 のサポート	2 ページの『WebSphere Application Server 5.0.2』
Tivoli Data Warehouse Enablement Pack、バージョン 5.1.0.5 の機能拡張	2 ページの『Tivoli Data Warehouse Enablement Pack 5.1.0.5 の機能拡張』
単純化されたフィックスパックのインストール	
ISMP ベースのインストーラーと自動アップグレード機能	3 ページの『ISMP ランチャーと自動更新』
インストール手順	3 ページの『インストール手順』
拡張コンポーネントとレポート	
管理エージェントをアップグレードするための自動更新機能	7 ページの『管理エージェントをアップグレードするための自動更新フィーチャー』
サブランザクション・パフォーマンス・データを収集するための総称 Windows サブランザクションのしきい値	8 ページの『総称 Windows サブランザクションのしきい値』
リアルタイム・レポートの機能拡張	8 ページの『リアルタイム・レポートの機能拡張』
J2EE コンポーネントのデプロイ以降に発生した変更に応じて、ユーザーの J2EE インストールに関する情報を更新するための新規コマンド	8 ページの『J2EE コンポーネントをアンインストールするためのコマンド』
問題判別情報	9 ページの『更新済み問題判別情報』

更新済みオペレーティング・システムとデータベース・システムのサポート

この節では、IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 に対する更新済みオペレーティング・システムとデータベースのサポートについて説明します。

Windows 2003 オペレーティング・システム上の管理エージェント

このフィックスパックは Windows 2003 オペレーティング・システム上の管理エージェントをサポートします。Windows 2003 オペレーティング・システムを実行しているコンピューター上に管理エージェントをインストールするには、以下の手順を実行してください。

1. 管理エージェントをインストールしたいコンピューターに「5.2-WTP-FP01」というラベルの付いた CD を挿入します。
2. 以下のコマンドを実行してください。

```
change user /install
```

追加情報: **change user /install** コマンドは、ユーザー・モードを「インストール」に変更します。ステップ 3 を実行する前にこのコマンドを実行しないと、OSMAIN 変数が誤って解決される可能性があります。

3. **setup_MA_w2003.exe** コマンドを実行して管理エージェントをインストールします。
4. 以下のステップを実行して、管理エージェントが Windows 2003 オペレーティング・システム上で正しく実行されることを確認してください。
 - a. Internet Explorer をオープンし、「ツール」→「インターネット・オプション」の順に選択します。
 - b. 「インターネット・オプション」ウィンドウで「セキュリティ」タブをクリックします。
 - c. 「インターネット」アイコン (地球) を強調表示して、「カスタム・レベル」をクリックします。
 - d. 「カスタム設定のリセット」ボックスで「中」を指定してリセットし、「OK」をクリックします。

WebSphere Application Server 5.0.2

J2EE モニター・コンポーネントは、WebSphere Application Server 5.0.2 のインストールをサポートします。WebSphere Application Server 5.0.2 のサポートされるバージョンには、基本 (Base)、Enterprise Edition、および Network Deployment 管理対象サーバーが含まれます。

Tivoli Data Warehouse Enablement Pack 5.1.0.5 の機能拡張

このフィックスパックでは、Tivoli Data Warehouse Enablement Pack for IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 に対するいくつかの改善が提供されています。修正を含むパッチは次のディレクトリーにあります。

```
5.2-WTP-FP01\tedw_apps_et1\fp01
```

詳細およびパッチのインストール説明については、次のディレクトリーにある「*Tivoli Data Warehouse Enablement Pack for IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 README*」を参照してください。

```
5.2-WTP-FP01\tedw_apps_et1\fp01\bwm\doc
```

注: Tivoli Data Warehouse Pack をアンインストールして同じソース・データベースに再インストールする前に、次の重大な情報を読んで理解してください。Tivoli Data Warehouse Enablement Pack、バージョン 5.2 を IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance ソース・データベースに対して Warehouse 環境にインストールし、ETL プロセスを実行してレポートを生成した場合は、Tivoli Data Warehouse Enablement Pack をアンインストールし、同じソース・データベースをポイントして再インストールする前に以下のステップを実行する必要があります。

1. 次のディレクトリーにある `bwm_cdw_del_data.sql` ファイルを見つけてください: <Tivoli Warehouse インストール・ディレクトリー> /apps/bwm/pkg/v510/cdw/dml。この SQL ファイルがアンインストール中に実行されます。

2. 次の各行の先頭に '--' を追加してその行をコメント化してください。

```
--delete from twg.extract_control where extctl_target like 'BWM%';
--delete from twg.extract_log where extlog_target like 'BWM%';
```

3. ファイルを保管します。
4. Tivoli Data Warehouse Enablement Pack のアンインストールを実行し、Tivoli Data Warehouse Enablement Pack の抽出制御値を維持します。

上記ステップの実行後、同じソース・データベースに対して Tivoli Data Warehouse Enablement Pack を再インストールできるようになります。ETL プロセスは抽出制御からそのプロセスが停止した場所から再び実行されます。

IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 フィックスバック 1 のインストール

この節ではフィックスバックのインストール・ユーティリティーについて説明し、推奨インストール手順を提供します。

ISMP ランチャーと自動更新

このフィックスバックでは、サポートされるすべてのプラットフォームにアップグレード・コードをインストールするための次のユーティリティーを提供しています。

- 管理サーバーにフィックスバックをインストールするための ISMP ランチャー
- 管理サーバーから選択された管理エージェントへのアップグレード・コードの自動インストールを可能にする自動更新

管理サーバーと管理エージェントをアップグレードした後は、既存の J2EE モニター・コンポーネントのアンインストールと再インストールが必要になります。それにより、J2EE モニター・コンポーネントが確実にフィックスバック・コードを使用します。

インストール手順

1. フィックスバックをインストールするには、以下のステップを実行してください。
 - a. 管理サーバーに、「**5.2-WTP-FP01**」というラベルの付いた CD を挿入してください。
 - b. 次の実行可能ファイルの 1 つを起動して、ご使用のオペレーティング・システム用のインストール・プログラムを実行します。

表 2. 管理サーバー・アップグレード用の ISMP ベースのインストーラー

管理サーバー・インストーラーのファイル名	管理サーバーのオペレーティング・システム
setup_MSFixpack_w32.exe	Microsoft Windows 2000
setup_MSFixpack_sol.bin	Solaris オペレーティング環境
setup_MSFixpack_lin390.bin	zLinux
setup_MSFixpack_lin.bin	Intel ベースの Linux プラットフォーム (Red Hat Linux、SuSE Linux、および TurboLinux を含む)
setup_MSFixpack_aix.bin	AIX

2. インストール・ウィザードの指示に従って、管理サーバーをインストールします。

注: この手順の間に、WebSphere Application Server が停止して、再始動します。管理サーバーがポート 9449 を使用するよう現在セットアップされている場合は、管理サーバーのポート番号の入力を求

めるプロンプトが表示されたときに、別のポート番号 (たとえば、デフォルト・ポートの 9445 など) を使用するように管理サーバーのポート番号を変更してください。ポート 9449 は IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance の listen 機能に使用されます。

3. アップグレードされた管理サーバーから次のステップを実行して管理エージェントをアップグレードします。

a. (J2EE モニター・コンポーネントがインストールされている管理エージェントを更新している場合は、) 次のいずれかの環境が存在するときには、 **updateprops** コマンドを実行してください。

- セキュリティーが使用可能になっているアプリケーション・サーバー上で J2EE モニター・コンポーネントが実行されており、ユーザー ID またはパスワードが変更された。
- コンポーネントのインストール時にはセキュリティーが使用可能になっていなかったアプリケーション・サーバー上で J2EE モニター・コンポーネントが実行されており、現在はセキュリティーが使用可能になっている。
- 変更された管理ポート番号を使用するアプリケーション・サーバー上で J2EE モニター・コンポーネントが実行されている。

追加情報 : **updateprops** コマンドにより、フィックスパックがアプリケーション・サーバーへの接続に使用するユーザー ID、パスワード、または管理ポート番号を変更することができます。

upgradeprops コマンドについて詳しくは、 8 ページの『J2EE コンポーネントをアンインストールするためのコマンド』を参照してください。

b. 以下のステップを使用して、IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance を開始します。

- 1) Microsoft Internet Explorer を起動します。
- 2) 管理サーバーの URI を入力して管理サーバーにアクセスします。

追加情報 : 以下の例は、デフォルト・ポート番号を使用して **myhost.ibm.com** と呼ばれる管理サーバーの非セキュア・インストールの URI とセキュア・インストールの URI を示したものです。

- HTTP (非セキュア) の場合:
`http://myhost.ibm.com:9081/tmtpUI`
- HTTPS (セキュア) の場合:
`https://myhost.ibm.com:9445/tmtpUI`

c. 「システム管理」→「エージェント更新の作業」の順に選択して、「エージェント更新の作業」ウィンドウを表示します。

d. フィックスパックをインストールしたい管理エージェントをすべて選択します。

e. ドロップダウン・リストから「更新のインストール」を選択し、「Go」をクリックします。

追加情報 : 選択された管理エージェントは、必要なソフトウェアをダウンロードし、必要なファイルで更新を行います。自動更新機能について詳しくは、「オンライン・ヘルプ情報」を参照してください。オンライン・ヘルプにアクセスするには、ウィンドウの右上隅にある疑問符 (?) をクリックしてください。 7 ページの『管理エージェントをアップグレードするための自動更新フィーチャー』も参照してください。

4. (ご使用環境にアクティブな J2EE モニター・コンポーネントがある場合は、) 確実に J2EE モニター・コンポーネントが正しく操作されるように、次のステップを実行してください。

a. 「システム管理」→「エージェントの作業」とナビゲートし、J2EE コンポーネントが実行されているエージェントを選択します。

- b. ドロップダウン・リストから「コンポーネントの除去」を選択し、「Go」をクリックして、除去する J2EE コンポーネントを指定します。
- c. J2EE インストゥルメント・アプリケーション・サーバーを停止します。
- d. 管理エージェント・プロセスを停止します。
- e. <MA_root>/app/instrument ディレクトリーを開き、そのディレクトリー内のファイルとディレクトリーをすべて削除します。
- f. J2EE コンポーネントがインストールされたときに、アプリケーション・サーバーにインストールされたファイルおよび共用ライブラリーを削除します。

追加情報：以下はアプリケーション・サーバー・プラットフォームとオペレーティング・システムごとにリストされた、J2EE コンポーネントと共にインストールされるファイルとライブラリーのリストです。

WebSphere Application Services バージョン 4 および 5:

```
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/armjni.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/copyright.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/core_util.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/ejflt.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/eppam.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/jffdc.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/jflt.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/jlog.jar
<APP_SERVER_HOME>/lib/ext/probes.jar
```

WebLogic:

```
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/armjni.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/copyright.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/core_util.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/ejflt.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/eppam.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/jffdc.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/jflt.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/jlog.jar
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/ext/probes.jar
```

WebSphere Windows プラットフォーム:

```
<APP_SERVER_HOME>/bin/jjitipi.dll
<APP_SERVER_HOME>/bin/jjitipi.dll
```

WebSphere UNIX プラットフォーム:

```
<APP_SERVER_HOME>/bin/libjitipi.so
<APP_SERVER_HOME>/bin/libjitipi.so
```

WebLogic Windows プラットフォーム:

<APP_SERVER_HOME>/server/bin/ijitipi.dll
<APP_SERVER_HOME>/server/bin/ijitipi.dll

WebLogic AIX プラットフォーム:

<APP_SERVER_HOME>/server/lib/aix/libjitipi.dll

WebLogic xLinux プラットフォーム:

<APP_SERVER_HOME>/server/lib/linux/i686/libjitipi.dll
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/linux/i686/libarm.so
<APP_SERVER_HOME>/server/lib/linux/i686/libarmjni.so

WebLogic Solaris プラットフォーム:

<APP_SERVER_HOME>/server/lib/solaris/libjitipi.dll

- g. 管理エージェント・プロセスとアプリケーション・サーバーを開始します。
 - h. 「システム管理」→「エージェントの作業」とナビゲートし、コンポーネントをアンインストールする前に J2EE コンポーネントが実行されていたエージェントを選択します。
 - i. ドロップダウン・リストから「**J2EE モニター・コンポーネントのデプロイ**」を選択して、指定のエージェントに J2EE コンポーネントを再デプロイします。
5. (Windows 2003 および z/OS を除き、新規エージェント・インストールのみの場合): 新規管理エージェントをインストールする (アップグレードではない) には、以下のステップを実行してください。
- a. 「*IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance Installation and Setup Guide*」の記述通りに IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance、バージョン 5.2 インストール・イメージを使用して管理エージェントを実行します。
 - b. 以下のステップを実行してバージョン 5.2 agent.jks 鍵格納ファイルを更新します。
 - 1) フィックスパック 1 のインストール・ファイルにアクセスします。
 - 2) バージョン 5.2 agent.jks の鍵格納ファイルをフィックスパック agent.jks 鍵格納ファイルに置き換えます。

拡張コンポーネントとレポート

この節では、コンポーネントとリアルタイム・レポートに対する以下の追加と修正について説明します。

自動更新機能

ご使用環境の複数の管理エージェントに、このフィックスパックを含め、製品アップグレードを自動的にインストールできるようにします。自動更新を使用すると、それぞれ個々の管理エージェントを手動でアップグレードする必要性から解放されます。

総称 Windows サブトランザクションのしきい値

トランザクション全体のしきい値の設定に加え、総称 Windows サブトランザクションのしきい値を設定できるようにします。

J2EE コンポーネントをアンインストールするための updateprops コマンド

アプリケーション・サーバーのユーザー名、パスワード、またはポートの変更に応じて、J2EE モニター・コンポーネントのインストール準備のためのコマンド行サポートを提供します。

サブトランザクション・パフォーマンス報告

指定された期間、サブトランザクションのパフォーマンスを調査できるようにします。また、トポ

ロジー・レポートでノードを調査しているときにサブトランザクション・パフォーマンス・ビューを指定することもできます。このレポートは、トポロジー・ノードからのみアクセス可能です。

Overall Transaction Over Time レポート

データを表示できる管理エージェント数を 5 から 100 に拡張し、表示するエージェント・グループおよび個々の管理エージェントを選択できるようにします。

管理エージェントをアップグレードするための自動更新フィーチャー

自動更新フィーチャーにより以下のタスクを実行することができます。

- フィックスパックおよび将来の製品更新を自動的に複数の管理エージェントおよびモニター・コンポーネントにインストールする
- 更新をアンインストールする
- 自動更新機能を使用可能/使用不可にする

インストールされた更新がエージェントと 1 つ以上のモニター・コンポーネントの両方に影響する場合は、最初にエージェントが更新され、その後にコンポーネントが更新されます。アンインストールはこの逆の順序で行われます。すなわち、最初にコンポーネントから更新コードがアンインストールされ、その後にエージェントからアンインストールされます。指定された更新は、次回ポーリング間隔に開始されます。ポーリング間隔は、新規情報が管理エージェントに送信される、定期的にスケジュールされた時間 (デフォルトで、15 分ごと) です。

「エージェント更新の作業」ウィンドウのテーブルは、特定エージェントに対する更新が使用可能かどうかを通知し、更新状況を提供します。また、このテーブルは各エージェントで実行されているモニター・コンポーネントを表示し、各コンポーネントの更新状況を表示します。

自動更新の使用

自動更新の使用を開始するには、メインメニューで「システム管理」→「エージェント更新の作業」の順に選択します。オンライン・ヘルプはこのフィーチャーの使用について詳しいステップバイステップ情報を提供します。

自動更新に関連したイベント

フィックスパックには、自動更新のアンインストールが成功したか失敗したかを伝える 2 つのイベントが組み込まれています。

以下のイベントは、アンインストールの成功を示しています。

```
<message
  id="0x002C"
  tms_id="ITPMS0094I"
  tms_prefix="no"
  event_family="ManagementServer"
  symbol="ROLLBACK_COMPLETE"
  alt_symbol="Rollback-Complete">
  <text>エンドポイント・ロールバック・プロセスが正常に完了しました。 {0}</text>
```

以下のイベントは、アンインストールの失敗を示しています。

```
<message
  id="0x002D"
  tms_id="ITPMS0095I"
  tms_prefix="no"
  event_family="ManagementServer"
  symbol="ROLLBACK_FAILED"
  alt_symbol="Rollback-Failed">
  <text>エラーのためにエンドポイント・ロールバックが失敗しました。 {0}</text>
```

総称 Windows サブトランザクションのしきい値

IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 では、総称 Windows トランザクション全体にはしきい値を設定できますが、サブトランザクションには設定できません。このフィックスパックにより、総称 Windows サブトランザクションにしきい値を設定できるようになります。

新規総称 Windows ポリシーの作成プロセス中は、トランザクション全体に対してしきい値を作成できません。サブトランザクションのしきい値を作成するには、まずポリシーを実行してから、サブトランザクションがノードとして表示されているトポロジー・ビューを参照します。トポロジーからサブトランザクション・ノードを右マウス・ボタンでクリックし、「しきい値ビュー」を指定してしきい値を作成することができます。

オンライン・ヘルプは、総称 Windows サブトランザクションしきい値の使用についてさらに詳しい情報を提供しています。

リアルタイム・レポートの機能拡張

このフィックスパックでは、レポートに対して以下の更新済み機能を提供しています。より詳細に検討される場合は、オンライン・ヘルプを参照してください。

サブトランザクション・パフォーマンス

このフィックスパックでは、サブトランザクション・パフォーマンスの折れ線グラフが導入されています。これにより指定した期間のサブトランザクションのパフォーマンスを調査することができます。グラフの線は、最大 100 の個々の管理エージェントによって検出された時間を描写します。最大 5 つまでの線をカラーで、なおかつレポート期間中に収集された集約データを示すポイント付きで表示することができます。

トポロジー・レポートのベース・ノードを右マウス・ボタンでクリックすると、メニューに「サブトランザクション・パフォーマンス・ビュー」項目が組み込まれます。それを選択してサブトランザクション・パフォーマンスを検査することができます。

Overall Transaction Over Time

このフィックスパックでは、Overall Transaction Over Time レポートに対する多くの修正が提供されています。個々のエージェントを選択するほかに、エージェント・グループを選択して、そのグループのすべてのメンバーによって収集されたデータをグラフ化することができます。また、変更されたレポートでは表示できる管理エージェントの数が 5 から 100 に拡張され、グラフの線はレポート作成期間中に収集された時間を描写します。最大 5 つまでの線をカラーで、なおかつ集約データを示すポイント付きで表示することができます。カラーで表示されていない線は、グラフの灰色で表示されたバックグラウンドにあり、いつでもフォアグラウンドに移動する (カラーで表示する) ことができます。

J2EE コンポーネントをアンインストールするためのコマンド

このフィックスパックでは、J2EE モニター・コンポーネントのアンインストール準備に使用される **updateprops** コマンドが提供されています。J2EE インストゥルメント・アプリケーション・サーバーへのアクセスに影響する変更が存在する場合に、J2EE コンポーネントをアンインストールしたくなる場合があります。J2EE コンポーネントのインストールは、インストゥルメント・アプリケーション・サーバーのユーザー名、パスワード、またはポートに依存し、インストール完了以降にその情報の一部またはすべてが変更されていることがあります。

updateprops コマンドの使用法

J2EE のインストール以降に J2EE アプリケーション・サーバー上で認証情報が変更されている場合は、J2EE コンポーネントを除去する前に **updateprops** コマンドを実行します。このコマンドは以下の例で示されているように、`serverName` と `serverHome` という 2 つのパラメーターを取ります。

```
updateprops.sh -serverName server1 -serverHome /opt/WebSphere/AppServer
```

このコマンドは、ユーザー名、パスワード、およびポート番号の入力を求めるプロンプトを表示します。このいずれのフィールドも変更したくない場合は、Enter キーを押してください。該当のプロパティー・ファイルが新規値で更新されます。パスワードが暗号化されてプロパティー・ファイルに書き込まれ、J2EE コンポーネントの除去が可能になります。

更新済み問題判別情報

以下の情報は問題の診断と解決を支援します。

インストール後、ストア・アンド・フォワード・エージェントが AIX、バージョン 5.1、保守レベル 5100-02 上の管理サーバーへの登録に失敗する。

AIX、バージョン 5.1 オペレーティング・システム、保守レベル 5100-02 上にストア・アンド・フォワード・エージェントをインストール後、`ibmproxy` サービスが開始直後に停止するため、ストア・アンド・フォワード・エージェントを管理サーバーに登録できません。この動作を解決するには、保守レベル 5100-03 の AIX オペレーティング・システムをインストールしてください。

組み込み DB2 インストールの管理サーバーには、ポート 50000 が必要である。ただし、ポート 50000 は SuSE SLES 8.0 オペレーティング・システムにも使用される。

注: この項目および関連する次善策は、IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 のインストールにのみ適用されます。このフィックスパックでは新規管理サーバー・インストールは提供していません。

組み込み DB2 インストールを持つ管理サーバーが、SuSE SLES 8.0 オペレーティング・システムのフレッシュ・インストールを持つコンピューターで実行されると、ポートの競合が発生することがあります。SuSE SLES 8.0 オペレーティング・システムは `/etc/services` でポート 50000 を要求しますが、そのポートは DB2 インスタンスも使用します。その結果、DB2 インストールが停止します。この問題が発生すると、次のエラーが `/tmp/db2setup.his` ファイルに表示されます。

```
ERROR:DBI1702E The specified service name or port number conflicts with existing values in the TCP/IP services file.
```

このエラーを解決するためには、組み込み DB2 インストール付きの管理サーバー・インストールを実行する前に、次の行をコメント化して `/etc/services` ファイルを編集してください。

```
mrt          50000/tcp      # telnet interface of mrt programs
mrt          50000/udp      # telnet interface of mrt programs
```

トポロジー・レポートを IBM ホームページ・リーダーで表示およびナビゲートできない。

トポロジーはアプレットであり、アプレットはホームページ・リーダーではサポートされていません。ただし、すべてのトポロジー・データはテーブル形式でも使用可能です。IBM アクセシビリティ・チェックリストによって発表されたガイドラインに沿った、テーブルでデータを表示できる機能により、トポロジーは視力に問題のあるユーザーにもアクセス可能です。テーブルは IBM ホームページ・リーダーで表示できます。

IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 のインストールが、Intel ベースの SLES 8.0 オペレーティング・システムを稼働する管理サーバー上で失敗する。

注: この項目および関連する次善策は、IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 のインストールにのみ適用されます。このフィックスパックには新規管理サーバーのインストールは組み込まれていません。

IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 管理システムをインストールすると、インストール・ユーティリティーは <WAS_BASEDIR>/properties/version/was50_fp1_linux390.ptf という名前のファイルを探します。Intel ベースのインストールでは、このファイルが存在しません。

次の 2 つのうちいずれかの次善策を使用して、Intel ベースの SLES 8.0 オペレーティング・システムに管理サーバーをインストールしてください。

- **デポ・インストール** (詳しくは、「*IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2 Installation Guide*」を参照)。インストール・プロセスを開始する前に、MsPrereq.xml ファイルを編集して <WAS_BASEDIR>/properties/version/was50_fp1_linux390.ptf というファイル名を含む行から **390** を除去します。インストールを継続します。
- **<WAS_BASEDIR>/properties/version/was50_fp1_linux390.ptf という名前のゼロ・サイズのファイル**。この名前を持つ、サイズが 0 のファイルを作成すると、インストール・プロセスはファイルが存在すると認識して、正しく先行します。この次善策は、CD からのインストールが必要な場合に有効です。

Windows Internet Explorer KB832864 セキュリティー・パッチのインストール後、管理サーバー GUI が時々ロードに失敗することがある。

Windows オペレーティング・システムに Internet Explorer の KB832864 セキュリティー・パッチをインストールしていて、管理サーバー GUI の起動ができなくなった場合は、以下のステップを実行してください。

1. Internet Explorer を起動します。
2. 「ツール」→「インターネット・オプション」の順にクリックし、「詳細設定」タブをクリックします。
3. 「HTTP 1.1 設定」の下にある「HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックスをクリアします。
4. 「OK」をクリックして、ブラウザをクローズします。
5. 新規 Internet Explorer ブラウザーをオープンして、管理サーバーにログインします。

「HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックスをクリアすると、使用中のほかの Web アプリケーションが中断されることがあります。その場合には、「HTTP 1.1 を使用する」設定に関係なく、以下のステップを実行して管理サーバーにログインするためのパッチを持つすべてのブラウザを使用可能にしてください。

1. URL `http://<MS_HOSTNAME>:9090/admin` を表示して、管理サーバーのための WebSphere Administrator Console をオープンします。
2. ナビゲーション・ツリーで「サーバー」→「アプリケーション・サーバー」の順に選択して、「アプリケーション・サーバー」ウィンドウをオープンします。
3. 「server1」を選択して、「Web コンテナ」ウィンドウをオープンします。
4. 「HTTP トランスポート」をクリックして、「HTTP トランスポート」ウィンドウをオープンします。
5. **9445** 行の下線付きアスタリスク (*) をクリックして、「9445」ウィンドウをオープンします。
6. ページをスクロールダウンし、「カスタム・プロパティー」をクリックして「カスタム・プロパティー」ウィンドウをオープンします。
7. 「新規」をクリックして「新規」ウィンドウをオープンします。

8. 「名前」フィールドに「**MaxKeepAliveConnections**」と入力します。
9. 「値」フィールドに「**0**」と入力し、「**OK**」をクリックします。
10. 「メッセージ」ボックスで「**保管**」をクリックします。
11. 「**マスター構成に保管**」ボックスで「**保管**」をクリックして新規設定を保管します。
12. 管理サーバーを再始動します。

サイトがトラステッドでない場合、**Windows 2003 Internet Explorer** ブラウザーが管理サーバー GUI をロードしない。

Windows 2003 オペレーティング・システム上で管理サーバー GUI を起動できない場合は、次のステップを実行してください: 「**ファイル**」→「**このサイトを追加**」→「**トラステッド・サイト・ゾーン**」の順にクリックします。「**ログイン**」ウィンドウが表示されます。

既存の XML ファイルに追加されたアプリケーションが「**コンポーネント管理**」ウィンドウに表示されない。

XML ファイルを持つ ARM アプリケーションを使用可能にし、新規アプリケーションをその XML ファイルに追加すると、アプリケーションは listen ポリシーに関連したウィンドウには表示されますが、「**コンポーネント管理**」ウィンドウには表示されません。

新規アプリケーションが「**コンポーネント管理**」ウィンドウに表示されるようにするには、既存の XML ファイルを編集するのではなく、新規アプリケーション用の追加の XML ファイルを作成してください。

コントロール・パネルからフィックスパックをアンインストールしてもディレクトリー構造が完全に除去されない。

ディレクトリー構造を完全に除去するためには、「**エージェント更新の作業**」ウィンドウからのみフィックスパックをアンインストールしてください。フィックスパックは、**IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2** をアンインストールする前にアンインストールする必要があります。

管理サーバーの登録が **500** 管理エージェントに制限されている。

このフィックスパックでは、管理サーバーに登録できる管理エージェントの数は最大限度 **500** に強制されています。**500** 管理エージェント限度到達後に管理エージェントのインストールが試行された場合、管理エージェントは管理サーバーに登録できません。管理エージェントのインストール・ログには次のメッセージが含まれます: `<![CDATA[500 agents installed.Max licenses exceeded.]]>`

J2EE モニター・コンポーネントのデプロイメント・コードが開始スクリプトの装備に失敗することがある。

J2EE モニター・コンポーネントが、スクリプトによって開始される WebLogic アプリケーション・サーバーにデプロイされると、自動的にインスツルメンテーション・コードが開始スクリプトの **Java** コマンドの直前に挿入されます。**Java** コマンドは、Java 仮想マシン (JVM) を起動します。

ほとんどの WebLogic 7 開始スクリプトでは、WL_HOME/bin ディレクトリーの **startWLS** スクリプトへの呼び出しと共にインスツルメンテーション・コードが追加されます。開始スクリプトが **startWLS** スクリプトを起動すると、J2EE モニター・コンポーネントは **startWLS** への呼び出しの直前に、インスツルメンテーション・コードを挿入します。アプリケーション・サーバーの開始スクリプトが **startWLS** を起動しないで JVM を直接起動すると、J2EE モニター・コンポーネント・コードは開始スクリプトの装備に失敗します。

この問題を回避するためには、アプリケーション・サーバー JVM を開始する呼び出しの直前に、次のコメントの 1 つをアプリケーション開始スクリプトに挿入してください。

- (Windows CMD プログラムの場合) "@rem Insert TMTF Instrumentation"

— または —

- (Unix シェル・スクリプトの場合) "# Insert TMTF Instrumentation"

特定の環境で、総称 **Windows** が **3270** エミュレーション記録を再生できない。

総称 Windows は、時々 3270 エミュレーション記録を再生できないことがあります。これは、記録が日本語で行われた場合、非常に頻繁に起こります。ほとんどのユーザーは、エミュレーション記録を正常に再生できます。しかし、端末エミュレーション再生に対する正式サポートはありません。

使用可能アプリケーションが多くのトランザクションを持っている場合、データベース・トランザクション・ログが満杯になる。

ご使用環境に多くのトランザクション (8000 個のトランザクションなど) が含まれた XML ファイルを持つ多くの使用可能アプリケーション (20 個のアプリケーションなど) がある場合、データベース・トランザクション・ログが満杯になることがあります。その場合は、その名前のアプリケーションがすでにその管理エージェントに存在するというエラー・メッセージが表示されます。トレース・ログは、トランザクション・ログがデータベースで満杯であるというエラーを表示します。このエラーを解決するには、データベース・トランザクション・ログ・ファイルのサイズを増加して再始動してください。ご使用データベースのトランザクション・ログ・ファイルのサイズを増加する方法については、データベースの資料を参照してください。

本書は、IBM® Tivoli® Monitoring for Transaction Performance の 5.2-WTP-FP01 バージョン 5.2.0 および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GI11-4027-00
IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance 5.2
Fix Pack 1 Readme

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.6

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2003. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

GI88-6713-00

